2 随筆

単元のねらい

◆『徒然草』に表れた作者のものの見方、感じ方を捉える。
◆文語助動詞の種類と用法を理解する。
◆作者の主張を読み取り、批評する。
・現代にも十分通じる作者の主張を正確に捉え、そこから作者のものの見方や考え方、論の立て方がどのようなものかを考える。
・文意に重要な役割を担っていることが多い助動詞の種類と用法を理解することで、内容を正確に捉え、現代語訳できるようにする。
・論の立て方が異なる二つの章段の構成を比較し、作者の主張の仕方について、意見を交換させる。
今に生きる古文の世界を自分の知識として活かし、作者の考え方や感じ方を通して、自らの生き方を問い直すきっかけともしたい。

単元の構成

「徒然草」から四つの章段と、参考教材として序段を取り上げた。「亀山殿の御池に」は、名人譚のひとつで、まず逸話を語り、作者の主張で結んでいる。「大事を思ひ立たん人は」は、無常迅速という認識を根底に据えた、道念についての章段で、冒頭から主張を前面に押し出し、その後に例話や比喩を述べる構成である。「奥山に猫またといふものありて」は、対象を冷静で客観的な視点で描く、作者の筆致の特徴を読み取ることができる。「花は盛りに」は、作者の美意識ついて、物の見方、捉え方がはっきりとした形で提示されている章段で、作者の論の展開の仕方について各自の考え方を持たせる。参考「つれづれなるままに」では、名文の調子を味わい、暗唱に挑戦させたい。
「古文を読むために4」では、助動詞について説明している。古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりにつ

いて学習できる。

「古文の窓１　無常の世を生きる」では、中世の文学作品に大きな影響を与えた「無常観」について、「平家物語」や「徒然草」などの文章を引用しながら、分かりやすく解説している。

「単元の言語活動２　作者の主張を読み取る」では、例話や比喩を語った後に主張を展開する「亀山殿の御池に」と、冒頭に主張を置き、その後に例話や比喩を述べる「大事を思ひ立たん人は」から、作者の主張を読み取り、文章の構造を比べて、どちらの形式が分かりやすいと思うかについて、意見を交換する。